

# 剣聖 小川忠太郎先生 の求道心

井手 勝美

## 1 小川先生の剣道と人間形成

昭和61年、小川先生に初めてお会いして、直観的に本物の剣道家ではないかと推察し、宏道会の門を叩いて、色々な勉強をさせていただきましたが、まさに宝の山でした。現代剣道（スポーツ剣道）で30歳まで稽古<sup>けいこ</sup>してきた私には、その違いがはっきりと理解できたのです。先生の教えを受けてからは、人生の価値観、人間を観る眼、剣道に対して取り組む姿勢が変化してきました。これは、先生の魅力と宏道会の修行精神に感銘して、自然に感化され自己の意識を改革させられていったからだと思います。そして、先生が命を懸けて育てられたのが宏道会で、平成2年まで約60回程度先生と稽古をさせていただいたのは、誠に幸せであったと感謝いたしております。そこで、先生の教えや修行を思い出しながら、私なりに人間形成のあり方についてまとめてみたいと思います。

まず、「剣道の目的、何のために剣道を学ぶのか。」ということをも再認識させてもらいました。それは、「名利の奴隷にならないように。」という一言で目が覚めました。「段がほしいとか、試合に勝って有名になりたいという目的のために剣道はやるべきではない。」ということです。それは、あくまでも試合や段は奨励法であり、本当の目的は、

「真実の自己を育てること」「この世の中で平常心の余裕をもって、万事を処理できる人間になることであり、人格を創り、自己を錬り、自分の心の垢を取り、素直な心を養うこと」だそうです。それには命懸けという資本が大切で、「死に遭っても心が動じないことが剣の道でもある。」と言われていました。先生の精神は「至誠」が根本で、何事も自分で実践工夫して自得するまで一念一念を正念化し、一心に成り切って物事を最後までやり抜かれた、まさに道人の修行であったと思います。

そこで、先生の修行のあり方を振り返ってみますと、宏道会の稽古では必ず30分前に到着され、坐禅をした後に稽古は基本から一緒に身をもって実践されていました。2時間以上も元立ちをされて、一人一人と法定の形や防具稽古と理屈だけでなく、身体で直接に打突の機会や間合などを指導していただきました。どんな者とも真剣かつ熱心に稽古され、面紐などがゆるむと壁に面を押し当てて締められていた様子や、良い機会に一本が出ると「いいとこ！」と言って、頭を下げられている様子を拝見して感心したものでした。また、どんなに寒い時でも足袋も履かないで、2時間以上の防具稽古と法定の形をされ、風呂に入られてから2階の師範室に上げられる時は、一步一步気合を入れながら上って行かれておりました。その時の様子を思い出すと、今でも胸が詰まります。

そして、次のようなこともありました。掛り稽古で先生は、小手でも面でも若い者にどんどん打たせておられましたが、その時血がポタポタと床に落ちていたので、みんなどうしたのかと不思議に思っていたら、先生の右手首が大きく腫れて切れた所から出ていました。それでも先生は、平気でみんなの掛り稽古を受けられていたこともあり、本当に頭の下がることばかりでした。弟子と共に修行し、身をもって導かれる先生を「正師」というそうですが、まさにそのお手本ではなかったかと、今更ながら感謝せずにはおられません。

それから、先生はよく「納得のいく本当の一本が出るまで修行しなさい。」と言われ、ある日のお話の中で「まだ、本当の一本が出ない。だから、ますます励みが出てくる。そして、人間形成という課題があるから失業がない。」というようなことも言われていました。平成2年の野間道場稽古納めの時にも、「今年を反省して、真実の自己から出た本当の一本がこの一年に一回でもあったら、今年の稽古は成果があったと思ってよい。」と言われ、平成3年の初稽古では、「本当の一本は、左足、顎<sup>あご</sup>、左手を崩さない正しい姿勢で、寂然不動の構えから出る。」という説明がありました。正しい構えと無心の境地が一体となり、気剣体一致から本当の一本が自然と出てくるのではないのでしょうか。

それでは、どのようにして人間形成の修練をしたらよいのか。小川先生が35年間、心血を注いでこられた宏道会の稽古内容が一番の近道だと思えます。簡単にまとめてみますと、

- (1) 坐禅で氣を養うこと(一日一炷<sup>いつちゆうこう</sup>香)。
- (2) 古流の形を稽古すること(法定の形、小野派一刀流、無刀流など)。
- (3) 3尺2寸の竹刀で切り返し、掛り稽古を積み重ね気剣体一致を体得し、捨て身の精神を養うこと。
- (4) 日常生活で剣道精神を実行すること(五戒=至誠など)。
- (5) 学問を身に付けること。
- (6) 陰徳を積むこと。

以上のようなことに心を配って修行していけば、自己形成から人間形成と進んで、自分自身で向上していくのが分かり、稽古も楽しくなってくるものだ、と先生も言われていました。

もう少しずつ説明を加えてみますと、

(1) 坐禅は、呼吸を整え、正氣(浩然の氣)を養うのにとても良く、雑念の入らない心境を身に付けることができます。数息観で三昧力を養い、自我を忘れ、無心の境地で剣道ができるようになれば本当の一本が出ると思います。真剣勝負の場合、ほとんど打突する以前に勝負がつくと言われるのは、この境地を体得しているかどうかではないでしょうか。また、先生は「日常生活や剣道でどうしようもない時は坐れ。」と言われ、とにかく毎日少しでもよいから坐ること、一生涯続けることが大切だと最後まで言われていました。それに、「坐禅に巡り合っただけでも幸せである。」と、御自身も亡くなられるまで続けられ、身体がいうことを利かない時は、天井から紐を吊って、それで坐禅の姿勢を整えられていたということもお聞きしました。亡くなられる1週間前にお伺いした時は寝ておられ、その時の状態は寝ながらにして数息観をされていたように感じ、まさに眠れる獅子というような威圧感でした。

(2) 古流の形についてですが、先生は「古流の形を身に付けなければ、すべて稽古は我流になってしまう。」と言われ、「直心影流法定は、至誠の精神を養うのに一番良いし、直心(素直な心)がない者は剣道が伸びない。」とも言われていました。また、「本当の気が充実すれば構えが決まり、<sup>けんせん</sup>剣尖が利いてくるし、頭の花辺から爪先まで一心に成り切って、一枚になることが大切である。」と言われて、「正氣(浩然の氣)を養うには、努力呼吸と打ち込み一本に数をかけること」というようなことを常に言われていました。それに「一本目は正念の固まりの気と言ってもよく機先を制する所が身に付けば、防具稽古の時は初太刀が打てるようになる。」と言われていました。次に、小野派一刀流の形は色々な技の修練のために良く、技で迷ったら一刀流の形でやり直すとよいと言われ、どんな古流の形でも最初の一本目に極意が入っ

ているし、流祖の心境までいかなとなかなか理解できるものではないし、説明もできないから、よくよく工夫して修練しなさいとも忠告されていました。

(3) 防具稽古は、3尺2寸の竹刀で切り返し、打ち込みを十分行ってから、互格稽古を九歩の間合から始めて、剣尖が触れたら打ち込む捨て身の稽古が大事であるし、真直ぐ、大きく打つのは、日本刀を持って真剣勝負した場合と同じような方法だと思います。このような稽古をやると、3尺9寸などの竹刀で打った時とは比較にならないほど気分が充実し、本来の捨て身が身に付くように思います。「本当の実力は、木刀か真剣の勝負でしか分からない。」と先生も言われていました。

(4) 日常生活では、宏道会の『五戒』を実践していくことが良いと思いますが、これが一番難しいのではないのでしょうか。「完全にできる人はいないし、これは人間形成の定規になる。」と先生も言われ、また実践されていました。毎日「直心じきしん是道これどうじょう場」という精神で、あらゆる場所で逆境を素直に受け入れ、自分の修行と思っにちにちこれこうにちて一生懸命努力すれば、「日々是好日」になっていくものだ、とも言われていました。

(5) 「学問を身に付けること」というのは、四書五経を中心とした漢籍や禅書を読んで、剣道の裏付けになることが大切であるということで、先生は「いくら良い本を読んでも、正しい行ぎょうをやらなければ、本当の意味は分からない。」「良書は心の栄養分であり、物事を行なう時の基礎にもなる。」と言われていました。そして、現在の学校教育では、この心を養うような指導がほとんどなく、知識の詰め込みで一流大学への進学競争とスポーツでの優勝争いばかりで、名利のための教育指導が目立ち、本来の教育である人間形成ということが、影を潜めてしまっているようです。先生も「今の学校剣道の当てっこばかりでは、本物の人物や剣道

家は出にくいと思う。」と言われていました。

(6) 陰徳とは、自分の善い行動を他人に知らせるとか知ってもらうことを求めないことで、黙々と陰徳を積んでいくと、何とも言えない心の満足を感じるものだと言われていました。例えば、ゴミを拾うとか、履き物をそろえるとか、ちょっとしたことの積み重ねが人間形成につながるし、善い行為が真実の心から発しているかどうかが大切であるとも言われていました。

色々まとまりのない書き方をしてきましたが、人間に生まれ本当の人間になって生活していくのがいかに難しいかということで、「当り前のことがなかなか当り前にできない。」だから本当の修行をして、人間形成をする必要があると思うのです。それには、正師について事理一致の修行を続けていくが、男谷精一郎先生や山岡鉄舟先生などの偉い古人の先生方をお手本として、勇猛精進の志で道の人となるように努力していくことだと思います。

私が何回か先生宅にお伺いするようになった、平成4年12月末頃のことでした。玄関を少し開けた時、ちょうど先生がトイレに行かれる途中で、廊下を半歩ずつゆっくりゆっくりと、経行きんぎんのように3メートル位の所を10分以上もかかって歩かれている後ろ姿を見て、胸が熱くなったことを今でも忘れません。最後まで自分でできることは、できるだけ人の手を借りずに実行されていたようです。そして、私が「先生、稽古はもう無理ですか？」とお聞きしたら、「身体が老衰でいうことを利かない。しかし、気分はまだ25、6歳だよ。」と答えられて、思わず二人で笑ってしまいました。まだ、まだ、稽古をされたかったんだと思います。それに、先生は「自分の剣道に満足する位、恥ずかしいことはないね。」と言われていましたから、天国でもいろんな先生方と稽古をされていることでしょう。そして、卒寿のお祝いで「自分

の人生に後悔はありません。」と言われた通り、本当の剣道修行ができ、その剣道が支えになって、これまで生きてこられたという満足感で一杯のお姿が改めて思い出されます。

先生の修行された人間形成の道を、一人でも多くの方々が実行され、勝負を超越し、克己精進を念頭においた宏道会の剣道が日本中に広まり、世界中にも伝わって、広く人類の平和に寄与せんことを願ってやみません。先生のご冥福を心よりお祈りして、思い出を閉じたいと思います。合掌。



小川先生（前列中央）次女道子様と。  
（山岡鉄舟居士墓前にて）

## 2 剣道界の至宝 宏道会

小川先生との最初の出会いは、昭和61年6月、成田高校での法定の形稽古の講習会でした。第一印象は、眼光鋭く、発声は腹から響き、どっしり、ゆったりとして、それに凜然とした振る舞いでした。話の内容は「法定の形では現在に成り切ること。今の1秒、1呼吸、1本が永遠につながる。」「法定は倒れる位真剣にやる。」「剣道は呼吸である。呼吸とは生命である。だから、丹田呼吸を身につけること」「剣道では無心になることが極意である。それには坐禅がいい。」「<sup>はら</sup>肚ができれば、どんな問題も解決できる。頭で考えて行動しては迷いが出てくる。剣道も同じ。だから<sup>ね</sup>肚を鍊る稽古をしなければいけない。」などと剣道即生活、人生につながるもので、心に響く、魅力ある内容でした。それに稽古は<sup>みなぎ</sup>気迫が全身より漲り、<sup>のど</sup>剣先の攻めは喉を突き刺す威力で、正に虎の餌食にでもなったかのようなようでした。こんな立派な先

生が稽古されている宏道会という道場は、一体どのような素晴らしい道場だろうと、心は宏道会へと向き始めていました。

昭和61年10月に宏道会創立30周年記念式があると滝口正義先生よりお聞きして、早速見学に行きました。小野派一刀流、直心影流法定の形、3尺2寸の短い竹刀での稽古など見るものすべてが古流そのもので、これこそが真の剣道という実感がしました。次回の稽古会より参加して、先生の貴重なご指導を受ける幸運な機会が得られるようになりました。宏道会の稽古内容は、まず法定の形で気合を充実させ、全身全霊で成り切る稽古を1時間ほど実施してから、連続切り返しを全力で力尽きるまで行い、一心になって三昧力を養うものでした。この切り返しを3～4回も実践すれば、竹刀も短いので、気力を出し尽くし息が上がってしまいました。その後、互格稽古は九歩の間合いより攻め合い、一本勝負、正に真剣勝負です。これを2～3本勝負したら、後は力尽きるまで掛り稽古で終る。このような内容を最初から元立ちとして約2時間、稽古される小川先生のお姿には頭が下がりました。もう85歳を過ぎた先生が身をもって、このように指導されている道場は他にないと思いました。稽古が終った後はお話があり、「自分を自分で励ますのが一番よい。自主的修行だ。それには主体性が必要だよ。」  
「先とは充実である。気剣体が充実していれば、どんな場合にも対応できる。それが社会にも通じなければならない。」  
「旺盛な気合で稽古をすること。気は剣道の元であり、十ある力は十出すこと。きついと思うからきついのであって、本気で掛ればいくらでも気力が出る。」  
「形が自分のものになれば、形と一致した稽古ができる。」などと、聞くことがすべて新鮮で感動の連続でした。それからの稽古会では、先生の魅力に引き付けられ、毎週足を運ぶようになり、縁とは感動であるとおつくづく思いました。一回一回の稽古が真剣で、充実し、楽しく、爽快な気分でした。まさに宝探しをしていて、宝の山に出くわした心境でした。



先生が宏道会の指導を断念された後も、日本武道館、野間道場と先生の後を追って稽古を求めて行きました。特に平成3年1月5日午前7時からの野間道場初稽古では、寒さのためか青白く、透き通った顔色で、防具を一つ一つ丁寧に身に付けられて、まさに真剣勝負で死を覚悟して来られた感じでした。稽古では今まで以上の<sup>すさ</sup>凄まじい気迫で圧倒され、我を忘れて掛り、<sup>すがすが</sup>清々しい気分で帰宅したことを思い出します。また、最後の稽古となった9月の日本武道館の月例稽古会では、面打ちを受けた後、腰から転倒されて、周りの先生方が手を差し伸べられた時、「大丈夫だ！もう一度。」と気迫の声で立ち上がり、命懸けの稽古を続行されたのには感激しました。

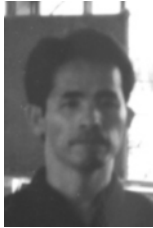
稽古ができなくなられた後も時々ご自宅にお伺いして、1回でも多くお話を拝聴したいと思っていましたが、12月30日が最後のお話となりました。「生きているうちは剣道。最後の一息まで、死ぬまでが剣道。」「逆境は心胆が錬れてよいなー。」「人間に生まれて剣道ができて良かった。最高だね。」などと約2時間、その後お奥様の手料理のうどんとお酒などを一緒にいただいたのは、一生忘れられない思い出です。そして、玄関先で私の姿が見えなくなるまで見送っていただき、涙が出る思いでした。その後平成4年1月29日まで2回ほど訪問して、死ぬまでが修行という、4～5日前まで坐禅を実践なさっているお姿を拝見することができました。

先生は宏道会のことを、「日本の剣道はそのうち行き詰まるかもしれないから、その時は宏道会が現代剣道の<sup>よ</sup>拠り所となる。だから<sup>ひじり</sup>聖の修行をして、もっと稽古を積み腕を上げ、心境を高めてほしい。」と期待されていました。

本当の剣道（小川先生の剣道、人間形成の剣道）を受け継いだ宏道会は剣道界の至宝であり、本当の剣道を一般剣道家にも伝える使命があると思います。本当の剣道が普及していく時、日本国の再生もあり、宏道会の使命も果せるものと確信しております。合掌

(注) 本稿は、編集部への依頼により人間禅附属宏道会の機関誌『宏道』にご寄稿いただいた玉稿に加筆していただいたものです。当初、1は『宏道』第24号(平成5年発行)に、2は『宏道』第25号(平成19年発行)に掲載されました。(編集部)

### 著者プロフィール



井手勝美(道号/水月)

昭和29年、佐賀県生まれ。国土館大学卒業(剣道部)。現在、高校教諭。剣道：古流(直心影流法定、一刀正伝無刀流、小野派一刀流)。禅：小池心叟老師に師事。書：寺山旦中居士に師事、筆禅道を学ぶ(山岡鉄舟居士の書を研究)。

### 続・剣禅一味

# 求道的剣士から見た 小川先生と一般剣道界

一髪君子 椎名 市衛

## 1 はじめに

昭和55年6月、全日本剣道連盟主催の剣道中央講習会は、警視庁武道館において全国の名人を後に従え、剣道範士九段、警視庁剣道名誉師範、小川忠太郎先生の剣道講話から始まった。

そのときの講師陣を思いつくまま並べてみると、堀口清範士九段、大野操一郎範士九段、佐藤貞夫範士八段、佐藤顕範士八段、伊藤雄二範士八段、中倉清範士八段、中島五郎蔵範士八段、湯野正憲範士八段、小中澤辰男範士八段、中村伊三郎範士八段、森島健男範士八段など、

現在森島氏を除いてすべて鬼籍の人であるが、誰一人とっても、たった独りで日本を代表できる<sup>すこ</sup>凄腕の先生方ばかり。よくぞ、これほどの剣士が一堂に集まったものだと、感心しない参加者はいなかった。

## 2 剣士の教養

いずれも一剣上においては甲乙のない剣士連だが、心法を語らせては小川先生の右に出る者はいなかった。

さて、上記の方々を指しているわけではないが……、とにかく剣の修行にのみ拘泥する者は、あまり難しい本を読まない。修行が技術と腕力のみ偏る傾向を持ち、強けりゃいい、勝てば官軍という意識が臭う。読んででも剣道の本あたりが相場となっていて、漢籍まで頭を突っ込む者は少ない。剣士の教養は、極めて乏しいといえる。加えて昔の師匠は、絶対に教えない。だから修行者は、下男同様にこき使われながら、その身辺に付いて盗む以外に方法はなかった。剣に言葉は禁物、真理は言語の絶するところにあるというから、まあそれでもいいと思うが、そんなこともあって武道家は、聞きかじりが得意で、真に弁の立つ者は少ない。つまり、言語を駆使して人に道を諭すのは、剣道家の最も不得意とするところだ。さらに書物に記し、剣の道を表す剣客は皆無に等しい。維新以前では、わずかに宮本武蔵の『五輪の書』あたりに一指を折るかどうか。

それに引き換え、禅門には書籍が多い。「直指人心 見性成仏」<sup>じきしにんしん けんしょうじょうぶつ</sup>「教外別伝 不立文字」と言いながら、実におびただしい禅書の氾濫を見るが、祖師釈迦牟尼仏が四万八千巻もの法門を開いているので、これも仕方がないとしよう。その禅僧の<sup>せきがく</sup>碩学に目をつけたのが柳生。柳生は大名までのし上がったほど頭がいい。従来の剣道の欠点を補うべく、沢庵和尚を連れてきて補佐させた。以来、剣は禅を心頼みとして「剣禅一如」などといって今日まで来ている。当時の全日本剣道連盟も禅には心頼みで、小川先生にばかり講演を依頼した。本物の話が

聞けて良いはずであるが、手柄を立てることができず不満を示す者もあった。また、余人に適当な人物が見当たらず、剣士の人材不足に情けなく思う識者もあった。昭和50年代は、全剣連が「剣道理念」を制定して間もなくで、その普及に躍起となっていた全剣連では、講師が小川先生オンリーになることも、また仕方がないといえ、仕方がないのかもしれない。

### 3 剣道理念

「剣道理念」とは、叩き合いと試合に終始する現代剣道を、本来の道へと導くための指標である。「剣道とは、剣の理法の修練による人間形成の道である。」これを当時の名人が十人掛りで作った。この「剣道理念」は、小川先生が冥土<sup>めいど</sup>まで抱いて行かれたほど愛着を込めた代物。皆さんご存知の御辞世「我胸に剣道理念抱きしめて 死に往く今日ぞ楽しかりける」である。小川先生亡き後、この尊い価値を分かる剣道人はもういない、巷間<sup>こうかん</sup>の剣道の行く末は、もはや決まると叫ぶ者がいた。現在の剣道界を見れば、それも過言とは言い切れない。

「剣道理念」初講話は、兵庫県で行われた。初回ということもあり、このときは禅門であれば師家に相当するような高段位の方々も多数参加した。小川先生のその時の、禅の蘊奥<sup>うんのう</sup>から迸<sup>ほとばし</sup>り出るお話は、漢籍、禅語がふんだんに飛び交い、内容が豊富で深みがあり、独特の声色も相俟<sup>あいま</sup>って、受講者の心を激しく揺さぶるものであった。誰もが感動し、誰もが小川先生の実力を思い知り、敬慕した。そして、この一件があって以後、禅に興味を持つ剣道家が急激に増えたという。この短い理念の一句について、小川先生は3時間たっぷり、台本も見ずにぶっ通しで話されたが、それでも話し足りなく思っておられた。智慧無尽蔵、大海の如しとはこのこと、ご努力の足元に及ぶ者はいない。

### 4 衝撃の講話

さて、しばらくした昭和55年の剣道講話は、この理念を1時間半ほど話された。時間が短縮されたのは、全剣連の役員が何度も講習会を担当しているうちに、聞き飽きて事の重大性を見失ってしまったからだという説もあるが、それは、現代剣士の実態をぴたりと言い当てているようで面白すぎる。講話時間を短縮しては、真の普及ができるのかと危ぶむ声もあったが、主催者側の意向が強く反映された。

この時の受講生は、全国から集まった四段から七段までの剣士約200名、<sup>そくぶん</sup>仄聞では八段の受講生もあったというが、定かではない。始まって年も浅い講習会のためか、どの受講生の目にも、将来の剣道界を担おうとする自負が<sup>みなぎ</sup>漲っていた。大半の者は、小川先生とは初見であった。得体の知れないと思われた老人の話は、出だしから皆を圧倒し、魅了した。夢に描いていた、本物の剣道の話が次々に展開していったからだ。

講話も中頃になったとき、ついに満座が凍り付く獅子吼が<sup>ししう</sup>発せられた。独特のお声を<sup>ひときわ</sup>一際大きくして、はっきりと、刻み込むような口調で言われたのである。「現在の剣道界に、本物の剣道家は一人もいない!!」

目覚めた人の、確信あふれる発言であった。明日の剣道界を担おうとしていた者は、全身から血の気が失せていく。正面に居並ぶ諸先生方はもちろん、小川先生自身でさえ本物ではないと言うのか。事が重大過ぎるのではないか。駆け出しの人間は、これから一体誰に習えばいいと言うのか。講習生の心は、ドーンと奈落の底に突き落とされてしまった。ところが、やったとばかり小躍りする者が少なくとも一名はおった。そいつは、自分が跡取り息子になれるかも知れないと思ったという。言われたことが事実ならば、兄貴分たちを追い越せるからだ。つまり、自分が一番になる可能性ができたと思ったのだ。厚かましいと言うか、前向きと言おうか……。彼は、さらに食い入るような目つきで、後の話に聞き入った。

「本物が現在になれば、過去を探せばいい。」なるほど、未来はどうしたって探しようがない。過去から変わらずにあるもの、それを探す他に道はない。「温故而知新、可以為師矣」(故きを温ねて新しきを知る、以て師と為すべし)か。講習生達の顔にも希望の色が差した。小川先生は更に言葉を繋げる。「それは、伝書と古流の形の中にある。」

再び、講習生達はがっくりと肩を落とした。それは、無理もなかった。なぜならば、伝書と言えば、分かりにくい筆字の草書で意味の不明な言葉が多く、拳句には「よくよく吟味すべし」とか「以下口伝」などと書いてあり、取り付く島もない。また古流の形は、同じ流派でも人によってまるで使い方が違うし、竹刀の剣道とは動きも太刀筋も全然懸け離れていて、現代に役立つ代物とは思えなかったからである。さらに、並み居る指導者のほとんどが古流の形を修行していないという現実も、一般の剣道家からすれば興味を失わせる一因であった。ここに、小川先生の狙いは全く外された形となった。先生は、迷える子羊たちに行くべき道を指し示したのに、誰も見向きをしなかったのである。

## 5 一個半個

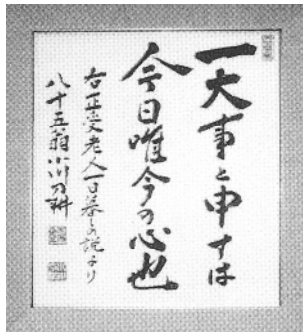
しかし、これほどの人数の中には、必ず臍曲がりがあるもので、このときも数名おったようだ。そのうちの一人は、そのとき小川先生に



著者の演武

のみ稽古を願った。理由は変わっている。「他の先生方はなかなか打てないのに、小川先生は簡単に打てる。やはり一番怪しい奴だ。」というのだ。先生との稽古を見ていると、誰でもが簡単に小川先生に打ち込む。そして、余り当たり過ぎるものだから、誰もが飽きて止めてしまう。そやつの疑問は、そこにあった。先生は本当に打たれているのか？ その日の話の中に「全受は不受」というのがあったではないか。その言葉を覚えていたのだ。小川先生の話<sup>ま</sup>を真に受けた者のみが、そこに気づくのだ。そやつは帰って早速伝書なるものを漁<sup>あさ</sup>り、読んでみたが、これは珍<sup>ぶん</sup>紛<sup>ぶん</sup>漢<sup>ぶん</sup>紛<sup>ぶん</sup>でお手上げになった。そこで、小川先生に質問をした。「先生、もっと先生の稽古を受けたいのですが……」もう少し指導を受けて切り口を何とか探し出す作戦。先生は優しく諭す…  
…「それでは、宏道会へ来なさい。」

この時から、一人の剣道人の新しい修行が始まるわけである。余白もなくなってきた、この後の話は次の機会に譲りたい。



一大事と申すは今日唯今の心也  
右正受老人一日暮らしの説より  
八十五翁小川刀耕

## 著者プロフィール

椎名市衛

昭和28年生まれ。大学卒業後、小川忠太郎先生に私淑。中学教師を中途退職後、道場建築アドバイザー、日本刀会主宰。木材と石材のスペシャリストとして民家、和風庭園などを手掛ける。雑誌「剣道日本」スペシャルライター。竜ヶ崎剣友会会長。直心影流法定を酒井章平先生から、北辰一刀流を谷島三郎先生（第六代）から継承。